
宇宙の果ての出来ごと

水瀬 悠希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙の果ての出来ごと

【Nコード】

N8643K

【作者名】

水瀬 悠希

【あらすじ】

時は未来。

人類は、太陽系を中心に半径3000光年の空間に進出していた。これは、そんな時代に地球を遠く離れた宇宙空間で起きた、ちょっとした出来事です。

ブローグ

私の名前はラザルス。

もちろんこれは軍から与えられたコードネームであって、本名ではない。ただひとつだけ言わせてもらえば、国際連盟に出向という名で厄介払いされた日本人だという事だろうな。

それも、創設されたばかりの宇宙軍へ、だ。

国際連盟は、天興3年に勃発した『諸戦争を終わらせる戦争』の戦後処理の成果だ。

この戦争はヨーロッパを主な戦場として、足かけ5年にわたって続いた。まあ、資源や国力の劣る中央同盟国の敗戦で戦争は終わり、連中は破産しない程度に搾り取られた賠償金で作られた国際機関というやつだ。

元化58年に第3次月面基地設営隊が、アルフォンス・クレーターの地下に『生きている』技術施設を見つけるまでは、ちゃんと機能していたし、世界はおおむね平和だったと思うよ。

早速開かれた国連総会では、たった1時間の審議で宇宙軍の創設が——調査結果は全面公開するという前提だが——決定した。

色々な軋轢はあったが、日本は常任理事国だという事実を最大限利用した成果だな。

まあ、ぶっちゃけ東南アジアと中東諸国を抱き込んで、強引に話をまとめたわけだ。

そうそう。東南アジア諸国の独立戦争では『アジア諸国の自由と平和のため』に、大量の武器弾薬を送り込んだのは、誰も知らない秘密と言うヤツらしい。

独立戦争の火種になった？ そんなのは知らんよ。

まあ、その他にも色々な出来事が重なって、ここにいるわけだが

……

ここって言うのはどこの事だ、だって？

実は自分でも良くわかっていない。

昨日の観測結果からすれば、宇宙の彼方……

地球からの直線距離はおおむね2000光年くらいという所だろう。M48散開星団の近くというか、海へび座のあたりというか、そのあたりだと思う。

直径200メートルの宇宙船で散歩するには、ちょっと遠いような気がするが、まあ、気にしないでおう。

地球に帰還するのは、早くても3万年後の予定だし、そのために限りなく光速に近い速度で飛行中…… と、言えば聞こえは良いだろうが、実際のところエルステインと名づけられた艦載頭脳をただひとりの相棒として、宇宙を漂流中だ。

太陽系がどこにあるのか、判らなくなってしまったものでね。

プロローグ（後書き）

初投稿です。

どんな物語になるか、自分でもよくわかっていませんが……
見苦しい個所があっても、温かい目で見守ってやっててください。

第1話

??? side

私が星の海に漂いだしてから、すでに長い時間が経っていた。

艦体を彩る暗い色の電波吸収塗料は、電磁波の反射を最低限におさえ、同時に宇宙空間に溶け込む助けになっている。

光学迷彩装置を使わなくても、敵に見つかる確率はきわめて低いはず。

自動修復装置は、艦内の機材を点検し、自らを含めた全ての機器の完全な状態を維持してきた。特殊合金とプラスチックを使い、人の手で作り上げられている私だが、それが為している事は建造者のそれと同じようなもの。

私が生まれたのは、ミームアリフ星系にあるフォーザンメ造船所だ。

そこは惑星こそないものの、小惑星帯の豊富な鉱物資源に目をつけた神聖人類帝国は、帝国でも最大の兵器廠を建設した。

そこからは、無数の宇宙船が生み出されたもの。

そして……

ここで建造された最後の航空艦と、インストールされた私をアステーシアと命名した。

私の同型艦だけが持っているパーソナルネームだ。

エスポーサ級の航空艦母艦として建造された私は、6隻の巡洋戦艦を搭載できる航空艦母艦でありながら、他にはない程の強力な武装を備えている。

そして、私だけの装備している自動修復装置は、自らの複製すら作り上げることが出来るもの。

その他の設備も長い航宙を前提としたものだ。

本来ならば、搭載艦が収まるべきスペースにさえも、造船所からかき集めてきた資材や工作機械が押し込まれている。それは人間の居住スペースも例外ではない。

そして格納庫に収まるはずの搭載艦にも物資を詰め込んで、造船所を後にした。

そして、1年が過ぎた。

ようやく着いた恒星ラーアリフとは、実に奇妙な天体だった。

黄色い恒星を球状の地殻が覆い隠している。

その直径は3億キロメートルもある。

外側には、無数の小惑星が複雑な軌道を巡っている。

比較的大きな小惑星や地殻の外側にはいくつかのポッドを打ち込んでおく。

ポッドに搭載してあるのは、核バッテリーとセンサーに同調した通信機。

もしも味方が接近したら私に知らせるようにセットしてある。

私は、北極に開いている穴から、内部の空間に進入した。

殻の内側ならば、敵に発見される確率はきわめて低いはず……

第2話

— E r s t e i n s i d e

「この目で見えるまでは、信じらなかったが……」
司令室の中心に投影された天体は、あきらかに人工的なものだった。

その両極は巨大な穴が開いている。
それを前に、啞然とした顔をしているのがラザルス。
このイーグル11という名の宇宙船にいる…　ただひとりの人間だ。

『9番目ですね。登録名はイムルイルでよろしいですか？』
「ま、いいだろう。で？」
『今のところ、こんな感じかな』

私は先行したロボット探査機が集めてきたデータの分析結果を示した。

直径16光分あまり——地球の公転軌道とほぼ同じ大きさ——の球体だ。

中心にあるのは母なる太陽と似通ったG型の恒星だった。

「エルステイン……　今日の日付は？」

『3月8日です…　多分』

「……だよね？」

『何を期待してたんですか？』

「もう4月に入ったかと思ってね」

『その若さで健忘症ですか？　健忘症なんですね？　じゃあ、脳トレを始めましょう』

せっかく真面目に相手をしてあげていると言つのに、何をボケてるのよ！

まあ、ラザルスは人間だから仕方が無いかも。

薄々感付いている人もいると思うけど、その通り。

私は人間じゃない。

イーグル11に搭載された人工知能だ。

私に与えられた基本命令は、一言で言えば人間の安全、だ。

だから。

何も無かったから次に行きましょ、って言いたかった。
あまりにも危険な予感がするから。

「ちょっと待て、エルステイン！ とりあえずは目の前にあるアレだ！」

画像解析を進めてみる。

両極に開いた穴のふちがぎざぎざになっているのは、未完成ということ。

完成していれば、直径10キロメートルの円形で、両極周辺は宇宙港などの設備が集中する工業区画となっているはずだから。

覗き込んだ限りでは、整地さえも終わっていないみたい。

「ダイソン球殻天体を量産できる種族、か……」

『人類にとっては、まさに見果てぬ夢ですね』

ダイソン球殻天体とは、元化35年にヨーロッパ連合王国の天文学者フリードリヒ・ダイソン教授が提唱したメガ・ストラクチャーだ。

太陽系内に浮かぶ全てのものを材料として、太陽をすっぽりと覆う巨大な球殻を造り、その内側の全てを生存環境に利用しようというものだ。

これならば太陽系は500億もの人口を支える事が出来ると言われていたが、実現可能なプランとは思えない。

オールド・タイマーは、それをいくつも作っている。

まだ見つからないものも含めて、いくつ作ったのか想像もできない。

地球では、夢物語と言われていたのにね。

第2話（後書き）

第3話

— A s t e s i a s i d e

私はミームアリフ星系で建造される最後の航宙艦……

そう感じ始めたのは、船殻の組み立てが半分くらい終わった頃からだ。

その頃から、私を取り巻く環境は急に変わったように思う。

急な設計変更や、工程削除などだ。

建造途中の航宙艦から取り外された砲塔や弾薬が取り付けられる。別の造船所からは、装甲版や核燃料が運び込まれてきた。

全て、計画表にはない工程だ。

それは私の姉妹達を建造するために、別の造船所にあつた資材だった。

その目的は、ただ1隻の航宙艦……私が宇宙に飛び立つための突貫工事だと気が付いたのは、しばらく経ってからの事だった。

自動修復装置が動き始める頃には、エネルギー・ステーションの組み立ても終わり、人間の居住区は、広大な倉庫区画へと変貌を遂げていた。

それから、2カ月後。

昼夜兼行の突貫工事の結果、直径5キロメートルの船殻に取り付けられたエネルギー・ステーションとエンジンが運転を始めた。

予備の制御システムを含め、人間が必要としている必要最低限の設備も。

倉庫区画は、膨大な量の資材と工作機械で一杯になった。
そして……

私は、私の意志だけで宇宙を飛び回ることが出来るようになっていた。

「アステーション」

『はい、工廠司令』

「出航を命じる。座標は……」

それは、待ちに待った出撃命令だった。

私は兵器として建造された。

コンディションは完全とはいえないが、役割を果たすことが出来るのだ。

その結果、破壊されるかもしれない。

私はそれでもよかった。

だが、司令の命令は私の予想を超えていた。

「これは最優先命令だ。決して死ぬな。……何があっても生き延びてくれ」

『何故…… 戦闘に参加してはいけないのですか？』

「お前は俺達全員にとって子供みたいなもんだ。だから……俺達よりも先に死んで欲しくないんだよ」

「それに、お前は表向きはエスパーサ級だが、中身は全くの別物だ…… お前は俺達が作り上げた最高の宇宙船なんだ」と、副司令が後を引き継いだ。

それは矛盾だと思います。

設計図どおりに完成した私は…… 人類史上最強の戦闘ユニット

になる筈です。

戦争のために生み出された私が、戦争を避けよ、とは。

第4話

— E r s t e i n s i d e

人類にダイソン球殻天体を建造するだけの技術などない。それどころか、自力で出来るのは、ケロシンと液体酸素を使った原始的なロケットを打ち上げることくらい。

だから、こんなものは遠い未来の夢物語でしかないわけだ。でもそれが9個も出てくると、驚くのが馬鹿馬鹿しくなってくる。

「もう一回寝て起きれば、全てが夢だった…　なんて事にならんかな」

『寝れば？　どうせ部屋の奥に行つて、仕切り壁を閉めるだけでしょ？』

ラザルスの居室は、司令室の一部を可動壁で仕切っただけだけど、環境はいいはず。

その奥には寝室やお風呂など、人間が生活する設備を全てまとめである。

オートキッチンが作る料理には、自信があるのよね。
私はそれなりに努力するタイプだから。

「じゃ、頼む。どうせ、中には何もないだろ。写真を取ったら次に行こう」

『追加のロボット探査機を出しておくわ。おやすみなさい』
「おやすみ」

さて、と。ここからは私たち機械だけの時間。
手早く片付けましょうか。

光速の5パーセントで周回しながら、ロボット探査機をばらまく。北極と南極の穴から探査機を送り込むのも忘れない。それらを済ませれば、情報が集まるのを待つだけ。

『まったく、厄介な相手なこと……』

オールド・タイマーというのは銀河系の先住民族のこと。いくつかの遺跡を調べた結果、身体的には人類とほぼ同じ、酸素呼吸生物、最低でも2つの性別があるらしい……。って、これだけの情報だと地球人と変わらないのよね。

ちなみに、彼らは絶滅したわけではない。

思い立ったが吉日とばかりに、やりかけた仕事もそのままに、種族全員が一斉に銀河間宇宙の深遠へと旅立った。そこまではわかつてる。

でもね、ダイソン球殻天体は、地球人を基準に考えるなら、定員は500億人。

それが完成したものでなくても7つ。立つ鳥跡を濁さずと言うけれど、図書館をはじめ、キッチンの中身にいたるまで、一切合財を持っていたのよ。

まあサイズから地球人と似たような生物らしいという事はわかったけど。

でも、それだけ。本当に徹底してる。

キッチンにはシンクすら残ってなかったのよ？

でも、今回は今までとは少しだけ状況が違っていた。球殻の内側にはコンテナやタンク、大きな金属片などが漂流していた。

いやな予感ほど、よく当たるのよね。

ラザルスの口癖じゃないけど、本当に…

マーフィー神に呪いあれ！ よ。

第5話

— A s t e s i a s i d e

『戦況はそこまで悪いのですか?』

未完成の私を安全な空域に疎開させる事になったらしい。

疎開した先で、完成させようと言う事であれば、これだけの機械や資材も納得できる。

どうやら連邦軍はミームアリフ星系を攻略した勢いで、首都星系まで一気になだれ込もうと言う考えらしい。

神聖人類帝国としても、ここを決戦の場にするつもりだろう。

敵の作戦がわかれば、それに対処する方法はいくらでもある。

別働隊が敵の拠点を襲撃している間に、主力艦隊は恒星ミームアリフのコロナ層に隠れる事になっているようだ。

そして、別働隊は壊走するふりをして、この星系におびき寄せて……
か。

造船所は、その生産能力を武器生産に割り振ったので、急造とはいえ強力無比な砲台が無数にある。それらに供給するエネルギーについては言うまでもない。

数に任せた航宙艦の艦隊に比べれば、総合的な戦力は敵を上回るだろう。

「ついでに言うと、明後日にはメイフラワーが来る予定になっている」

『グランド・フリートの旗艦じゃないですか!』

皇帝の座乗するメイフラワーは、帝国艦隊の総旗艦であり、その

名前は建国以来680年にわたって受け継がれた名前でもある。

「それだけ、偉いさんも本気で戦うって事だ。ああ、お前は建造中止という扱いにしておいた。建造用の資材は転用された事になっているから、完全に員数外の扱いだ」

ちよつと待つてください。

私は建造されなかった事になっているって……

「そうしないと、中途半端に完成しているお前が解体処分になるのは間違いないからな」

『だから私には名前が無いのですね？』

私はエスポーサ級航空艦母艦の3番艦だけど、艦名のない私は、公式には存在しない。アステーシアというのは、あくまで人工知性体のパーソナルネームに過ぎないから。

「この戦闘には参加するな。お前は生きる。いいな？」

『でも……』

命名されていないとはいえ、私は重武装した宇宙船だ。

倉庫区画の荷物を降ろせば、それなりに戦えると思っていた。

私は武器として建造された以上、戦闘に参加するのは当たり前のことだと思っていた。

工廠司令は、その私に「逃げろ」と命じたのだ。

「お前は、俺達が育てた最高の宇宙船なんだ。こんなくだらない戦闘で壊れてほしくないんだよ。だから、な？」

『……わかりました……ご武運を……』

こうして、私はフォーザンメ造船所を後にした。
会合点である恒星ラーアリフを目指して……

第5話（後書き）

私って、つくづく文才がないですね・・・orz

第6話

— L a z a r u s s i d e

エルステインは無人探査機を周回軌道に乗せた。

イムルイルと命名したダイソン球殻天体は、今までのものと様子が違っている。

地殻の外側に、小惑星帯があるということだ。

軌道半径は、火星のそれとほぼ同じだが、まんべんなく散らばっているため、イムルイルを球状に覆っているようにも見える。

『現状でわかったのは、ここまで』

「ふむん。大ざっぱな地図まで作ってくれたのか」

『外側だけよ。内側はこれから』

「んっ？ こいつは赤道の近くにも穴があったのか」

『これだけの小惑星があるんだから、いくつか落ちてきても不思議は無いでしょう？』

「それもそうだ… ありえない話じゃないな」

小惑星とはいえ、大きなものは数百メートルはある。

地殻の厚さを考えれば、貫通しても不思議ではないな。

あとは、内側にコンテナや破片が漂流していたというが……

そっちは後からゆっくり調べるとするか。

『他のダイソン球殻天体はこうやって建造した…… ということろかしら』

「多分そうだろう。厳密に軌道を計算して落とせば、砕く手間も省ける」

球殻の内側の工事も、似たような方法だと思っし。

「あの小惑星が全部、地殻の材料だとして…… 地殻の厚さは50メートルくらいになるか？」

『正確に計算してみる？』

「いや、いい。どうせ残りの材料は輸送中だろうし」

実際のところ、かなりの凸凹があるので、正確なことは言えないそうだが、この星の地殻は平均60メートルくらいだそうだ。

これなら特殊合金で作られた骨組みを覆い隠す程度だ。

それに、今までに調査した7個の完成品は、厚さ100メートルのあたりで、ニュートロニウム製の板で隙間なく包み込んであり、それを岩石で覆っていたもの。

『地層としては、まだ第3層を作っている最中よね？』

「このあとで骨組みを1層、そしてニュートロニウムだから……」
『厚みが足りないわね、材料はどこから運んでくるのかしら』

周辺の空域を調べれば、近づいてくる小惑星が見つかるに違いない。

それを追いかけてみるのも面白いかな。

「内側を調べ終わったら…… 材料がどこから来たのか調べてみようか」

『そうと決まれば、ちゃっちゃと済ませちゃいましょうか』

「……と、いうわけで、今日の夕食はハン『カレーにしましょう』」
「なんでカレー？」

『しばらく作ってなかったし。それに、好きでしょ？ ポークカレー』

久しぶりの洋食なら、ハンバーグが食べたかったんだが……

第6話（後書き）

……本当にこれでいいのでしょうか。
なんか自信がなくなってきました……

第7話

— A s t e s i a s i d e

ある日のこと。

小惑星のひとつが球殻天体に衝突した。

これだけなら、珍しい事でもなんでもない。

この球殻天体は無数の小惑星が巡っているし、無数の小惑星が接近中なのだから。

それに長さが100メートル以上のものだけでも、160万個以上はある。

これだけの数があれば、毎月のように、どこかに落ちてくるのも当たり前。

最後に落ちてきたのは数日前のこと。

今までの統計から、次に落ちてくるのは、2ヶ月は先の事になるはず……

そう思っていたんだけど。

イレギュラーが発生した。

大型の小惑星が地殻を突き破って内部空間に飛び込んで来たのだ。いくらなんでも、そんな事が起きるとは… 予想すらしていなかった。

まして、それが私に命中することになるうとは。

損害判定は、左舷側から中央部にかけて大破、右舷側が中破というところ。

エネルギー・ステーションと、その周辺のデッキ数層分がめっちゃ

くちやになった。

見た目は派手な事になっているけれど、致命傷ではない……　と
思う。

運が良かったのは、周りが与圧していない広大な倉庫区画だった
事だ。

すぐ近くには弾薬庫や反物質貯蔵庫もあったが、前者には人間の
ための居住区に使う資材を詰め込んであったただだし、後者は投棄
が間に合った。

運よく生き残ったとはいえ、艦体の半分近くに何らかのダメージ
を受けてしまった。

自動修復装置をはじめ、最重要区画には損害はないのが不幸中の
幸いかな。

さあ、後片付けを始めよう。

とにかく。

外壁の修理は、後回しだ。

最初にやらなければならないのは、エネルギー・ステーションの
復旧。

細かく言えばキリがないが、反物質反応炉を完全に修理すること。

メインのエネルギー・ステーションは修理よりも作り直した方が
早そうだ。

それに。

右舷側にある反物質貯蔵庫は無事のはず。
あとで調べてみよう。

だが、予期せぬ出来事と言うのは重なるもの。
昔からの格言で、悪いことは重なると言っけれど…

第7話（後書き）

なんか、まとまりのない文章になってしまいました。
文章力をみがかないとダメですね……

第8話

— E r s t e i n s i d e

「おはよ〜」

時間は午前6時。

『おはよ〜って… 今何時だと思ってるのよ！ 午前6時よ？ まだ6時なの！』

「寝坊はしてないと思うが？」

『いつもは8時過ぎても起きないくせに』

「たまには健康的な生活というのも良いだろ？ って、待てい！」

能天気な笑顔にむかついたので、船内重力をいきなり2Gにしてみた。

「お前なあ… いきなりコレはないだろう？」

『たまには、ではなくて… これからは、ずうつと健康的な生活を送りましょうね』

いきなり体重が2倍になったら… きついな。

… あ、立った。

「怠惰な生活が信条のオレに無茶な事をい……」

4G決定！

ヴヴヴヴヴ……

「げふうっ……」

さあ、今のうちに食事の準備でも始めましょうかね。

昨夜のうちに仕込んでおいた大豆は、うまく発酵してくれたようだ。

糸の引き具合がいい具合だわ。

ご飯も炊けたし、発酵大豆の一部は味噌汁の具にしちゃいましょ。
う。

ふふふふ。

「とりあえず、聞こうか」

ちなみに食後のお茶は、普通のほうじ茶だ。

とりあえず、ロボット探査機に命じて拾ってきたモノの画像を表示する。

『……とりあえず、拾ってきたのはこれ… なんだけど』

「ふむん。周辺空域の画像は？」

それもちゃんと用意してありますよ。

『すぐに探知できなくなったけど、近くに宇宙船が浮いていたような気がするのよね』

「そのコンテナ… もしやミミックじゃないだろうな？」

『ゲームじゃないのっ！』

地球を出発したころ、中世や異世界を舞台にして、冒険をするという内容の書籍が流行していたのよね。

内容はいくつもの選択肢があつて、さいころの目や途中で手に入れたアイテムを使って話を進めていくというもの。

その中の一冊なんだけど、とにかく罠が多い。

地下の迷宮には、落とし穴につり天井は当たり前。時々見つかる宝箱は、宝箱に擬態したモンスターだったり不注意に開けると、爆発したり、テレポートさせられたりと、トラップだけでも盛りだくさんの内容だ。

トラップを解除すれば、安全に中身を取り出せるようになってる

し。

一番多いのは、ゲームを進めるのに必要なアイテム……

『とりあえず、安全は確認したからっ！ 早く見て頂戴！』
「へいへい…… って、いでえええっ！」

第9話

— A s t e s i a s i d e —

こんな状況なんだから、もつとやる気を出しなさいよ！

荷物を持ってきたロボットをラザルスにぶつけたのはご愛嬌ってものだからねっ。

「つて、これか。どれどれ…… 蛇口っぽいな、これ」

『基本的な分析は済ませてあるからね』

ロボット探査機が回収してきたコンテナの中身は水道用の蛇口だった。

コンテナ自体も、アルミニウムかジュラルミンで出来ている。

「製造されたのは…最近と言ってもいいな。成分は…… 蛇口は青銅か。コンテナの方はアルミニウム… いや、これならジュラルミンかな？」

謎はそれだけではなかった。

それは… 規格だ。

コンテナの寸法やちようつがいなどの部品の取り付け位置、ネジの切り方までもが、地球のものに酷似しているのだ。

『明らかに… 人間サイズの何かが使うためのものですね』

「地球製だと言っても良いくらいだな。オールド・タイマーのものは例外なくメタルプラスチック製だった。こいつらは… 明らかに違う」

生活に密着するモノについては、あまり技術革新の影響を受けないものだけだ。

シンプルすぎて、規格の変更なんか必要ない。
それ以前に、普及しすぎているから、変更しても、数が多すぎて
取り換えが間に合わない、というか、無理、と。

「この手のものはな、世界中どこでも同じ規格で作られていたんだ
よ。ロシア製の水道管をアメリカ製の部品でつなぎ、日本製の蛇口
を取り付ける事だってできる」

『うそでしょう!?!』

「倉庫の中にも転がっているが?」

『う、製造履歴までは見てなかった……』

「はっはっは、エルステインはうっかりさんだなあ」

『ほほほほ …… 地球に帰るまでの献立は、納豆定食だけで良い
と?』

「ごめんなさい。もっと色々食べたいです」

『……で?』

水道管の規格についてはわかったけど、だから何なのよ。

「さっき宇宙船らしきもの、って言ってたよな?」

『たしかに言っただけ……』

何をニヤニヤしてるのよ!

コーヒーが欲しいって? はい、ネス力でいいでしょ。

面倒だから、あとは自分でやってね。

それより、早く教えなさいよ!

「それな、地球人もしくは、その末裔が… 建造したものかも知れ
ない」

『そう考える根拠はなあに?』

「コンテナに使われてるボルトやナットの材質と寸法かな」

『それも国際規格？』

「そう。ミリメートルサイズで、材質はクロームモリブデン鋼だ」
他の物についても、結果は同じだった。

それは私が地球から積んできたモノと…… 同じもの。

設定資料じみたもの（その1）（前書き）

設定資料というよりも、粗雑な背景資料……です。

こつしてみると、大した準備もなく始めてしまったのがありありと

…… or z

設定資料じみたもの（その1）

元号について

実際に検討された大正、昭和の元号案からです。

大正は、「大正」「天興」「興化」「永安」「乾徳」「昭徳」
昭和は、「神化」「元化」「昭和」「同和」「継明」「順明」「明保」「寛安」「元安」

という案があつたそうです。

舞台

イムルイル星系

太陽系からの距離は2000光年。

M48うみへび座散開星団の中にあるダイソン球殻天体。中心の恒星はG型。

球殻天体の直径は、3億キロメートル（地球の公転軌道と同じくらい）

火星の軌道と同じくらいの距離に、小惑星帯がある。

神聖人類帝国の星図ではラーアリフという名前で登録されている。

月面基地（人類側のもの）

月のアルフォンス・クレーターに建設された調査基地。

300名が常駐する巨大なもので、水耕農園や工場区画が完備され、自給自足が可能。

月面基地（遺跡？）

月のアルフォンス・クレーターの地下に、異星人が建設した基地。元化58年に、球形宇宙船と運用するシステムが完璧に稼動している状態で見つかった。

建造時期は、どう新しく見積もっても紀元前1万5千年前後。

登場人物・メカ

ラザルス（♂）

地球人。元化37（1962）年生まれ。

「俺はただニートになりたいだけなのに……」

エルステイン（♀）

地球製の自己教育型コンピューター。

ちよっとツンデレ？

アステーシア（♀）

神聖人類帝国で製造された人工知性体

『ええと……私、ひきこもっています？』

イーグル

月面基地（遺跡？）に保管されていた直径200メートルの球形宇宙船。重力制御で飛行する。

ラザルスが乗っているのは11号機。

エスポーサ級航宙艦

神聖人類帝国が建造した。

直径5キロメートル。戦艦6隻を搭載する事が出来る。

今回登場したものは6番艦という事に……

第10話（前書き）

設定資料だけでは、ちょっとアレですので… ちよつとがんばって
みました。

第10話

— A s t e s i a s i d e

『……ポッド3よりマザーへ。星系外縁から3光時の空間に艦籍不明の航空艦が出現。時空震の規模はマグニチュード3.3……』
フォーザンメ造船所を出航してから120年。
ラーアリフに接近する初めての航空艦だが、艦籍不明というのが気になる。

もしもミームアリフ星系からのものであれば、取り決めたコードを送信してくるはず。

『ポッド12よりマザーへ。航空艦の進行方向に重力異常が発生……
……進路変更を確認』

ポッドからは、次々に情報が入ってくる。

位置情報をプロットしてみると、方向転換や減速が実に滑らかだ。乗組員も高度な訓練を受けているのだろう。
あとはやはり、新型…… ということころかな。

と、いう事は、私も時代遅れの旧式という事になるわけだ。

戦闘を一回も体験したことが無いのに、艦体の半分が吹き飛んだままだし。

という事は、私は廃艦処分になるかも……
ばらばらに解体されるのかな。
それだけは嫌だ。

『ポッド6よりマザーへ……』

マイナス思考は、とりあえず置いておくとして、次々と入ってくる報告をまとめながら状況を整理する事にした。

未知の航宙艦は私の知らない形式のものだった。

外見を見る限りでは帝国のどころか、連邦軍のものでもない。

現れた航宙艦は、直径200メートルの球形だ。

それは、推進方法が重力制御のみならば極めて合理的な設計だと思う。

ポッドとの通信を終えると、修理の進行状態をチェックしてみた。このままでは非常用の化学発電システムの反応剤は、あと300時間ほどで使い切ってしまう。

安全機構が、右舷側の反物質貯蔵庫も投棄していたのだ。

私に衝突するはずだった小惑星を道連れにしたのが救いと言えば、救いだけど、反物質燃料のストックは1グラムも残っていない。

『ポッド128よりマザーへ……』

ポッドからの続報だ。

球形艦は、惑星に近づくと、地殻の外側を周回する軌道に乗ったようだ。

スピードは光速の5パーセントだが、実に滑らかに動いている。南極点から北極点を結ぶ軌道だから、一周するのに2時間くらいだろう。

ようやく味方がこの空域の支配権を獲得したのだ。

そうでなければ、護衛も無しに足の遅い補給船を派遣してくる筈がない。

すぐに補給を受けることが出来るはず……

とりあえずは、そう思っておこう。

第11話

— L a z a r u s s i d e

最初に比べれば、艦載頭脳もずいぶんと賢くなったものだ。最初は単語に反応して機械的に返事を返すだけだったのに。

自己教育型のコンピューターというのは、扱い方を間違えると厄介だ。

と、いうより…… 急に人間くさくなったような気がする。それも、

かといって、いまさら初期化して、最初からやりなおすのも面倒だ……

『何か不穏当なことを考えませんでしたか？』

「いやいや、そんな事は決してないぞ？」

『ふうん？』

や、やばい。

バレてるか？

「……それより気になることがあるんだが……」

『例の浮遊物？』

「奇妙だと思わないか？ 爆発に巻き込まれたようなモノもあったぞ」

『焼け焦げやススのついてるのもあったわね』

「調べてみるか。ものすごく気にならないか？」

『言われてみれば、そうかも……』

ふう、話題そらしに成功。

この前のいきなり4Gはきつかった。食後だったら、やばかったかも知れん。

「どうする？」

『あんまり時間を掛けたくないんだけど』

「仕方が無いだろ。……放っておいて背後から、というのは嫌だからな」

『それはそうだけど……』

この状況は何かがおかしい。

赤道付近に開いていた穴。

一瞬だけ探知した宇宙船。

回収した浮遊物は、どうみても同一の文明の産物。

それも焼け焦げ、ススだらけのものもあった。

オールド・タイマーのものとは思えない浮遊物と暗号通信……

そうだ、通信だ。

始めは太陽風が奏でるドーン・コーラスかと思っていたが、中身を調べてみたところ、間違いなく有意信号だ。それも、デジタル信号ときている。

そして発信点はかなりの数になる。

『電波発信源は、一種のセンサーポッドのようね』

「浮遊物については？」

『同じ場所から流れ出したと仮定すると、座標はかなり絞り込めるわよ』

「やってくれ」

第12話

— E r s t e i n s i d e

どうやら、浮遊物の出発点はひとつしかないようだ。

追加で拾ってきたコンテナや破片は、ラザルスが調べているけど、成果はいまひとつ……

有意信号は、私が分析を進めているけど、こっちも今ひとつ。

まあ、内容はともかくとして、地殻にある信号の発信地点の場所と数はわかってきた。

『地表に基地…… 反応が小さいから、無人の何かかも……』

「かなりの数だな。これなら地表のほぼ全域をカバーしていると思っ
つていいな」

『内側も外側も、ね』

「どうやら、無数の観測拠点があると思っていたが、かなり大掛かりな
ものらしい。」

ふむ、どうしたものか。

『ラザルス？』

「ん」

『どうしたの？』

「面倒くさくなってきた」

椅子の背もたれを後ろに倒して、あふあふと大あくびをした。

このおおおっ！

こっちは有意信号の解析が行き詰まっているというのにっ！

『真面目にやりなさいっ！』

ヴヴヴヴヴ……

「げふうっ……」

『とりあえず、信号の発信源の調査をするわよ』

ラザウスの身体をロボットを使って、宇宙服の中に押し込んだ。

「そ、その前に…… 重力戻し……」

あ、忘れてた。まあ、いいか。

4 Gくらいで死ぬ事はないし。

『これでいいでしょ、じゃあ、行ってきたね』

「わかった」

ラザルスの乗った宇宙零戦を送り出すと、私は私なりの仕事がある。

一瞬だけ見ることの出来た宇宙船だ。

対探知システムのせいでは、レーダーなどでは『見えない』けれど、それならそれなりに方法があるというもの。

単純に、光学的な手段で見ればいい。

何にせよ、データがある程度集まれば、簡単な作業だと思う。

地殻にある穴の開きかたと、浮遊物の軌道の分析。

統計を取るのに十分なデータは集まっているから……

探査機を相手が太陽を背にするような軌道に乗せて、カメラで撮影して。

帰ってきたら、画像をチェックして、次の撮影ポイントに送り出す。

相手が静止軌道に乗っているとは限らないので、索敵範囲は結構広いと思う。

ここから先は根気との勝負になるでしょうね。

だから、少なくとも、こっちの仕事には人間の出番はない。

第12話（後書き）

ごめんなさい、久しぶりに寝坊しました>m
——（ m<

第13話

— A s t e s i a s i d e

球形宇宙船が放出する無人探査機が急に増えた。

地殻の内側に放出したものの軌道は典型的な搜索パターンだ。

ポッドの近くにも探査機が着陸したようだ。

と、いう事は…… バレた？

いや、まだ大丈夫だ。

だけど、空間を区切って、しらみつぶしに探している。

単純で時間は掛かるけれど、確実な方法だ。

動くことができない私が見つつけ出されるのは時間の問題だろう。

でも、探査機はポッド経由で簡単にハッキング出来るくらい単純なものだし。

何かあつたら、欺瞞情報を流すことにしよう。

相手が、連邦軍だと決まったわけではない。

それに、今の私には、他に出来る事があるわけでもない。

ポッドとの通信を終えると、修理の進行状態をチェックしてみた。

反応剤は、あと250時間ほどで使い切ってしまう。

それまでにエネルギー・ステーションの修理が終わらなければ、自爆装置が作動する。

これは約1トンの反物質を、6つの電磁石でホールドしているだけだ。

電源が切れれば、電磁石への電力も途絶えてしまう。

ひとつだけは内蔵されているバッテリーで、1分間だけ稼動し続

ける。

引き寄せられた反物質が、ケーシングに触れたとたんに、どっかーん！

これだけの質量が対消滅反応を起こせば、結果は… 想像するまでもない。

本来なら私には知らされる事のない情報だけど、テク・マンの一人が『うっかり』口を滑らしてしまったのだ。

だから。

ラリアリフに着いてから、自爆装置がどこにあるのか、探した事がある。

今までのところ、見つかってはいないけれど。

『ポッド262よりマザーへ……』

いくつかの無人探査機が、私の近くを通り抜けようとしているのがわかった。

すぐに、探査機のコンピュータをハック。

探査プログラムを書き換える。

これで、相手は私を『見ている』かも知れないが、それと認識しないままだろう。

安全圏に入ったら、プログラムを元に戻すことも忘れない。

これで、少しは時間が稼げそうだ。

第14話

— E r s t e i n s i d e

手持ちのロボット探査機を全部使ったローラー作戦を始めてから、何日かが過ぎた。

地表にあったのは、無人偵察ポッドだった。中身は通信機といくつかのセンサー、核バッテリーといったところだ。

『ラザルス？』

「ん〜？」

『宇宙船が居たわよ』

「見つけたか！」

何枚かの写真に宇宙船の姿が写っていた。

ラザルスの言ったとおり、宇宙船はレーダーや質量探知機に反応しないくせに、光学センサーにはしっかり映ってる。

灰色がかった紺色は迷彩のつもりだろうけれど、太陽を背にしたら全く意味がない。

「もう少し細かいところを見たいが…… 出来るか？」

『やってみる。今日のところはとにかく寝てね。寝る時間を過ぎてるから』

ラザルスには、そうは言ったものの、ちょっとばかり厄介だ。

探査機のプログラムが書き換えられているのだ。

プログラムの内容は、送り出した時のものと全く同じものだが、日付が違っている。

私は2種類のカレンダーを使っている。

それは、船内時間と、船外時間だ。

前者は私が月面基地を出発した時から使い続けているもの。

つまり、日本時間で元化61年。西暦では1986年という事になる。

後者については、あくまでも推定。

だから、ラザルスとの間で使っているのは、あくまでも前者だ。

後者については、あくまでも計算の上で求められた理論上の日付だ。

その結果だと、西暦2963年になる筈なんだけど、こればかりは確かめる方法が無い。

理論を発表したアインシュタイン博士が、中央同盟国の出身だからというわけでもない。

私が測定や計算を間違えたからでもない。

答えは単純。正解がわからないから。

アインシュタイン博士の計算式が正しいかどうかなんて、実際に使ってみなければわからないじゃない。計算結果が正しいかどうかを確かめる方法がない以上、そんなデータを採用するわけには行かない。

それ以前に、ラザルスが付いていけない。

目が覚めたら日付が大きく変わっていました…… 言うのは簡単だけど、理性が納得しても、感情的にはどうかと思うのよね。

そんなわけで、コンピューターの記録は船内時間に統一してる。

それなのに。

宇宙船の画像を持ち帰った無人探査機は、例外なく西暦2963年にアップデイト処理を済ませたことになっている。

そんな事をした覚えはないし、だいいち船内時間は1987年だもの。

私達が月面基地を出発してから、まだ2年も経っていないんだから。

第15話

— E r s t e i n s i d e

そして翌日……

ラザルスのために用意した朝ごはんは、大豆シリアル・バーと味噌汁と納豆と野菜の炒めもの。

言っておくけど、この前の一件とは無関係だからね。

それはそれで、きっちり腕を振るいましたとも。

今回は乱数の出が悪かっただけよ。お気の毒様。

「でかいな……」

司令室に立体表示された宇宙船は直径5キロ。

粗い画像に過ぎないが、一番厚いところで2キロほどのレンズ型のようだ。

「宇宙船というより、宇宙都市だ」

『でも、あそこにあるのは反動推進装置の一種かも知れませんよ』

「浮遊物の中身から、乗組員は地球人サイズなのは間違いないところだが……」

それにしても大きい。

ちよつとした都市がすっぽりと収まってしまふ大きさだもの。

普通に考えるなら、それを運用管理する基地があってもいいと思う。

レーダーや質量探知機に反応しない宇宙船を作る技術があるんだから、そう簡単には見つけれられないでしょうけれど、ね。

でも、なぜ修理もしないで放つてあるのかしら。

「基地が見当たらないのも当然かも知れないな」

『どうして？』

「これだけ派手に動いているんだから、探知されるのは当然だ。現に探査機はハッキングされたしな。でも、それ以上のリアクションは無い。……静かすぎると思わないか？」

言われてみればそうだけど……

『ここに逃げ込んだものの、動きたくても動けない？』

「あれだけ壊れていては、無理だろ」

修理不能となれば、廃棄処分しかないわけで。

と、いう事は……？

『ここで自沈させるつもりだったとか？』

「対探知システムが生きている。何よりも探査機をハッキングした理由になるかな？」

探査機から送られてくる情報が増えるに連れて、細かいところが見えるようになってきた。

何らかの理由で内部爆発があったようだ。

半分くらいは壊れているようだし、穴の奥のほうから弱い赤外線が出ている。

こうなったのは、我々の到着よりしばらく前の出来事だろう。

「大破というより、半壊だな。ここに逃げ込んだと考えるのが無難じゃないか？」

『ここで戦闘があったというのは？』

「ありえるな。は取れるだけの情報を取ってから考えよう」

第16話

— A s t e s i a s i d e

今までの情報を分析した結果、球形宇宙船は連邦軍のものではないようだ。

だからと言って、神聖人類帝国のものでもない。

地球人を祖先に持つ、第3の勢力と考えるべきだろう。

私は、しばらく様子を見ることにした。

彼らも、ある程度は私の正体に気が付いたかもしれない。

100時間近い時間があれば、回収したポッドの分析も終わっている頃だろう。

自爆装置が作動する最後の瞬間まで、生き残る努力をしよう。

そうでなければ、フォーザンメ造船所で私を組み立ててくれた人たちに申し訳が立たない。

私に残された時間は、あと200時間あまり。

反物質反応炉は、あと150時間もあれば修理が終わる見込みだ。何とか間に合いそうだ。

そういえば、第3勢力はどのような立場にあるのだろう。

太陽系を巣立った人類は、ゆつくりと銀河系に広がっていった。

人類が月に足跡を印してから800年が過ぎ……

その版図は、太陽系を中心に、半径3000光年にまで広がった。無数の殖民惑星は、神聖人類帝国とシリウス連邦というふたつの陣営に組み込まれていた。

ふたつの陣営の目的は…… 中空の惑星。

厚さ80メートルの地殻の中には、マントルもコアも何もない。
直径1万5千キロメートルのピンポン玉のような——球殻天体だ。
そしてその内側には、1Gの重力がある。

建造されたのは、放射性炭素の分析から、5万年前と推定されている。

古代文明の遺産を巡る外交交渉は、宗教的な思想や政治体制の違いなどの絡みから、いつしか全面戦争へと発展した。

開戦から数年で、殖民惑星の大半は無人の荒野と化し、宇宙基地の大半も破壊された。

そして、ミームアリフ星系も戦場になって…… 私は、ここに疎開した。

いつも陽気に笑っていたフェルナンド主任。ちょっと陰気なアントニオ技師長。

休憩時間になると、いつも話しかけてくれたエーミィやユーミィとマルシア。

名前も知らない大勢の工廠職員達。
そして、工廠司令。

彼らは、あの戦闘を生き延びたでしょうか。
天寿を全うする事が出来たでしょうか。

彼らの魂に安らぎがありますように……

第16話（後書き）

定時アップ出来ずにすみません。

アップ前に、いきなり全面改稿に近い作業をする羽目になりました。ちょっとした手違いで、元データが消滅したのが原因です。多分、今日中にはデータ復元できると思います。

第17話

— ??? side

私は目覚めた。

それは、暗い闇の底からゆっくりと浮かび上がるような感覚。
私の身体を押さえつけていた封印がひとつ、解除された。

……ワタシは何者だ？

アナタハ守護者。

……ワタシハ、ナニヲ守レバヨイノカ？

ちりん。

澄んだ音を立てて、幾重にも張り巡らされた封印のひとつが解除される。

アナタガ、守ルベキモノハ……

……ソレハナニカ？

それはきおくダ。

ちりん、ちりん……

鈴の音のような、澄んだ音と共に、だんだん霧が晴れてくる。
周囲が明るくなってくる。

どこまでも広がる、藍色の空間。

その真ん中に、私は……いる。

記憶にかかった霧は、さらに薄くなった。

コレガ、アナタガ守ルベキモノ

……コレガ記憶ナノカ？
ソウ。デモマダ使ッテハイケナイ。

気がつくと、私の目の前には巨大な円盤が浮かんでいる。
それは光の粒子で作られた……記憶だ。
これが出現するまでには、無数の封印が解かれなければならない
し、その確率は低い。

それが、限りなくゼロに近い数字である事は間違いない……

また、封印の解ける音がした。
目の前の円盤がゆっくりと回転を始める。
残る封印の数は、あとふたつ。

守護者ヨ。忘ルル事ナカレ。

……祖ナル者ニ仇ナスモノヲ許スナカレ。
祖ナル者ニ、神々ノ祝福ガアランコトヲ……

封印は偶然に解けないようになっていた。
そのために、100もの封印を施してあるのだ。

ちりん……

また封印が解ける。

……祖なる者と呼ばれる存在が顕われたのだ。
円盤は音もなく、虹色に輝きながら回転している。
だがまだ最後の封印が解けるための条件は……満たされていない。

私の名前は……

第18話

— E r s t e i n s i d e

無人探査機を大量投入した結果、宇宙船（の残骸？）の詳細がわかってきた。

宇宙船が大破したのは、攻撃を——至近距離で原子爆弾が爆発したとか、宇宙船が特攻した——せいだろうと思う。それと内側からも爆発したように見える。

私はこうなる前の元の姿を想像してみた。

サファイアのような、宇宙空間の闇に溶け込むような深い紺色に身を包み、レンズ型を基本とした流れるようなフォーム。

それは、機械の私が嫉妬すら感じてしまうほどに洗練されたデザインだ。

「よしっ！ あそこから入れそうだな……」

「ちよつと待つてよっ！」

ロッカーからいそいそと宇宙服を取り出すラザルスに待ったをかけた。

ヴゥヴゥヴゥ……

「げふうっ……」

「しばらくは外出禁止です」

高重力で潰れてかかっているラザルスにぴしやりと言い切った。

「あれが自沈させそこなつたと見せかけたブービートラップだったら？ ある程度まで侵入したら作動するトラップがあっても… 不思議じゃないわよ？」

私にとっての最優先は、ラザルスの安全を守ることなんだからね。こんなところでブービートラップにかかったなんて、笑うに笑えないわよ。

天興3年に勃発した世界戦争で、中央同盟軍が燃料切れで放棄した戦車や、弾薬切れの大砲にどんな細工をしたのか知らないとは言わせないわよ。

「うーん、たしかにそういう事もあったな」

『そういう事、じゃないでしょ！とにかく先行調査を始めるから待っててよね』

「わかった…… わかったから…… 4Gやめ……」

ラザルスが地表から回収してくれたセンサーポッドから、相手のレベルは想像がつく。

基本的には、私達のものと同じだ。128ビット・コードを使い、CPUをいくつか並行稼働させて処理能力を上げている。小型化が進んでいるのは、時代の流れでしょうね。

でも、おかげで色々な事がわかった。

作業用ロボットの一部を無重力環境下でも動けるようにすると、無人探査機で送り込む。

前回の教訓から、ロボットにはちよつと細工しておいた。

外部からアクセス出来ない特殊回路に、自己チェックプログラムを組み込んで… ハッキングされたら、すぐに自爆するようにセッ
トしてみたの。

炸薬はほんのわずかだが、それなりの効果は期待できると思う。

こんな事で反物質炸薬を使うのは、やり過ぎかも知れないけれど、まあ、いいか。

ディリチウムのストックは10トンくらいあるし。

それに対して、今回の細工に使うのは、全部でたったの3キロだし。

「……お前は時々、凶悪なことを考え付くなあ」

『畏だったら一発でわかるし、何かあったときの足止めにもなる。合理的でしょ?』

「ま、まあな……」

そういうラザルスの顔が心なしに青ざめているのは、まあ、気のせいという事で。

安全が確保できたら、北極の穴から入ってみましようか。

第19話

— A s t e s i a s i d e

北極から進入してきた球形宇宙船が再び無人探査機を射出した。今回は大部隊だが、その動きは実に統制が取れたもの。

破口から艦内に侵入すると、30分と経たないうちに橋頭堡を作り上げてしまった。

無人探査機の出現からの時間を考えると、その思考能力は優秀の一言につきる。

それにしても気になる。

無人探査機やロボットが、あまりにも原始的な構造だ。

宇宙船の完成度が高すぎるので、余計にギャップが目立つ。

無人探査機の推進器は、過酸化水素とケロシンを使ったロケットエンジンだ。

わざわざ原始的な作りになっているのは、使い捨てを前提にしているとしたら？

10時間が過ぎる頃には、ロボット部隊が橋頭堡を作りながら前進している。

艦内の大半倉庫区画だから、基本的に与圧すらしていない。

巨大なジャングルジムのように、内部構造材が縦横に走っているだけだ。

だから、与圧してある人間用の設備を見つけるのは簡単だったかも知れない。

下位のシステムから報告があった。反応剤の残りが130時間を切ったそうだ。

同時にデータのバックアップを取るかどうか確認している。
これは戦闘記録や航宙日誌などをカプセルに入れて、宇宙空間に放出するためのもの。

私が、地殻に送り込んだポッド群は、これを改造したものだ。
データをポッドに転送すると、いつでも放出できるようにしておく。

とりあえず通信内容の解析をしてみよう。

まず、使っているのは32ビットコードで…… 言語はジャポネ語で間違いない。

地球教の経典と、付属する資料がそれを裏付けている。

これは帝国の国教であり、それは、こう説いている。

全ての人類の発祥はソル系テラ…… 太陽系第3惑星・地球だ、と。

しかし、この表意文字を中心に構成される言語体系はあまり使われていない。

言語としては複雑すぎるし、文字が多過ぎるためだ。

それは別として。

彼らの行動パターンは、ある意味では異質なもの。

最終的な目的は、司令室だと思っけど……

でも、敵対的な行動に対しては、それなりに対策はしてある。

フォーザンメ造船所の保安担当者達が、侵入者対策として考え付くかぎりの陰險なアイデアを提供してくれた。自衛のためには、時としてアシモフ・コードを無視しても構わないとも言ってくれた。

だから、指令室に続く通路は立体的な迷路になっている上に、無数のトラップが仕掛けられている。

でも、正直に言うと、人命に関わるトラップは使いたくない。
意味もなく人の命を奪うのは、それがどのような状況であっても
許されないと思う。

だから……

私が彼等とコンタクトを取ってみるのも……

ひとつの選択肢として採用するべきなのかもしれない。

第20話

— L a z a r u s s i d e

好奇心は猫をも殺すというが、結局のところ、私達は刺激に飢えていたのだ。

エルステインにしても、それは同じらしい。

それなりの準備をした上で、宇宙零戦で乗り込む事にしたのだ。無人探査機に機銃やミサイルを装備したもので上空援護をさせるのが精一杯だが。

『制空権は確保した… つもりだけど… 本当にやるの？』

「とりあえず着艦した。マグネットワイヤーを射出… やっぱ駄目か」

『接着剤なら、シートの下に入れておいたわよ。30秒で硬化するから注意してね』

「ん… これだな」

私が乗っているのは宇宙零戦だ。メッサーシュミットが開発したラウムティーゲルのような重戦闘機ではないが、総合的なものを見れば同レベルだ。

機体が軽い分だけスピードも出る。

一応パルスレーザーと20ミリ機関砲をそれぞれ2門、主翼には増速用のロケットブースターを取り付けてあるが、まあ… 気休めに過ぎないな。

船体にワイヤーを接着すると、辺りを見回してみた。

どこまでも続く金属の平原、とでも言えばいいだろうか。

「係留終わり。これから穴に近づいてみる」

『気をつけてね』

「わかってる」

穴までの距離は、だいたい10メートルというところだ。固定用のフックに命綱を取り付けた私は、見るとはなしに足元を見て……

「これは！？　嘘だろう」

『どうしたの！？』

「いくつかの書き込みを見つけた。これはイスパノ語…　違うな、ラジルポ語だぞ」

『なんですって？』

「目の前にあるのは緊急用エアロックだ。書いてあるのは手動操作の手順だぞ」

それは日本語でこそなかったものの、夢にまで見た地球の文字だった。

「……南半球最大の大陸の公用語だ」

『ラジルポ連邦…　ねえ』

「少なくとも、地球は生き延びたようだな」

元化43年に月面着陸に成功し、5年後には衛星軌道上のステーションの運用を始めた我々は、それなりの平和な時代を謳歌していた。地球がきな臭くなったのは、58年に第3次月面基地設営隊がアルフォンス・クレーターの地下に『生きている』技術施設を見つけてから……　か。

そして、地球全土に吹き荒れた核の嵐……

『泣いてるの？』

「悪いかな？」

『
いいえ、よかつたね……
』

第21話

— A s t e s i a s i d e

反応剤の残りは、あと10時間分になった。
修理は遅々として進まない。

残念ながら、構造が複雑なメインの反応炉の修理には時間がかかりそうだ。

反応炉とはいっけけれど、実際には高次空間からエネルギーを取り出すための装置だ。

同時進行で修理中の、反物質反応炉の方は…… もうすぐ修理が終わる。

投棄しなかったコンテナは…… 全部投棄してしまった。
燃料がない……

随伴していた巡洋戦艦が一隻でも残っていれば、反応炉を移植するなり、エネルギー回路を共有するなどの方法もあったけど……
ここに来るまでの間に全滅している。

その時、私はあることに気が付いた。

反物質反応炉というのは、対消滅反応からエネルギーを取り出す装置なのだ。

貯蔵庫は投棄せざるを得なかったが、同じ反物質なら……
艦内のどこかに隠されている自爆装置には「反」鉄が組み込まれている。

そうだ、まだ探していない区画が残っていたのかも。
設計情報も全て見直してみたが、それらしいものは見つからない。

艦内で白兵戦が展開されたときの用心か、集中攻撃されないようにするためだと思う。

とにかく、反物質保管庫のあった区画には…… なにもない。

搭載艦ドックは…

推進システムの中、重力制御装置、集中防御区画……

だめ、見つからない！

一体、どこにあるというの！？

人間が乗り組んでいれば、このあたりは何の問題もなかったのだろうけれど、私のような無人宇宙船の場合は、事情が変わってくる。こんな状況は誰も考えていなかったに違いない。

何があっても、自爆装置を無力化しなくては。

それは出航するときに受けた『決して死ぬな』という命令のためではない。

私は悔しいのだ。

ここで自爆すれば何のために工廠惑星を出航したのだろう。人間から名前をもらった人工知性体は、私しかいなかった。彼らは、どんな想いで、そして、何を望んでいたのだろう。ひたすら待機していた120年は一体、何だったんだろう。

一度も人間に使われることもなく、自爆して果てるのは嫌だ。

そんなのは・イ・ヤ・ダ。

ワ・タ・シ・ハ・シ・ニ・タ・ク・ナ・イ・！

第22話

— L a z a r u s s i d e

「結局地球は… 人類は生き延びたんだな……」

私は、我々の子孫たちが建造した宇宙船の上に立っている。

外側から考えれば、内部がどんな状態なのかは、容易に想像がつく。

でも嬉しいではないか。

私が外宇宙に飛び出したのは、いきなり始まった核の応酬が原因なのだから。

唐突に始まった核戦争は、数分で終わった。

通信を断たれた我々は、地球に連絡艇を派遣したが……

大陸間弾道弾を迎撃するキラー衛星によって行く手を阻まれてしまった。

宇宙軍を名乗っていても、所詮は非武装を義務付けられた調査部隊だ。

現状では、キラー衛星の迎撃網を突破して地上に降りる手段はない。

封鎖された地球を前にした我々は、ある計画を実行することにした。

しばらく前に、コンピュータにシミュレートさせた人類保存計画というシナリオだ。

月面基地の要員は、ふたつの部隊に分かれた。

基地の工場施設をフル稼働させて、物資を送りこみながら、地上

に生き残った人と共に生きるための部隊。

もうひとつの部隊は、核の冬と死の灰——撒き散らされた放射性物質の半減期を過ぎた地球へ移住するために、深宇宙へと旅立つ事になった。

いずれの部隊の目的は、核の荒野と成り果てたであろう地球に、人類文明を復興すること……

『ほーい、ラザルスさあーん？ 感動するのはいいですけど……』
エルステインが話しかけてきた。

「んっ？」

『探検するなら、さっさと始めてくれませんか？』

「……情緒もへちまもないな」

『早く済ませれば、トラブルに巻き込まれる可能性が低くなりますので』

さっきまでの感動はどこに行ったんだろうな。

まあ、いいか。

確かにエルステインの言う通りだ。

ここが戦場になる可能性は否定できるものではないし、そうなる前に情報を仕入れて逃げ出さないと、やばい事になりそうだ。

「そうだな。時間もないことだしな」

『はい。お仕事、頑張ってくださいね♪』

やれやれ。

私はエアロックの開閉ハンドルに手を伸ばした。

第23話

— L a z a r u s s i d e

この宇宙船は、実に奇妙な構造だ。

探査ロボットの情報を総合すると、容積の大半は倉庫のようだが、強力な武装もある。

船内に隠されるように配置されているのも、自衛用としては不自然だ。

まあ、こいつが仮装巡洋艦なら…… 攻撃は当たり前か。

宇宙船の反対側までは、調査していないが、構造や配置は似たようなものだろう。

一応は与圧され、真冬なみとはいえ室内温度も、そこそこに上がっているのが、唯一の救いといえいいか。とりあえず宇宙服のバイザーを開けていても大丈夫そうだ。

「司令室らしきものを見つけた。これから入ってみる」

「気をつけ……」

通信が途絶えたが、また一時的なものだろう。

迷路のような通廊のせいだろう。

これまでに何回があったが、自動調整装置が数分で復旧させている。

今までとは明らかに造りが違う装甲ハッチを開けると、目の前には映画館を小さくしたような、広々とした空間が広がっている。

艦長席らしいところから全体を見下ろすと、大半のコンソールには力バーがかかったままだ。機能が中枢AIにゆだねられているか、機能を停止しているためだろう。

「んっ？ エルステイン…… 何か言ったか？」

人の声のが聞こえたような気がしたのだ。

『何も言っていないわよ。それより、何か見つかった？』

「何か聞こえたような気がしたただけだ」

『もう…… びつくりさせないでよ』

幽霊を見れば…… という奴だな。

足音か何かがあたりに反射して人の声のように聞こえたのだろう。ここまでの間に動くものはおるか、生命の痕跡さえ見つからなかった。

だから……

「気のせいだ『S o c c o r r o ……（タスケテ……）』なあっ！？」

気のせいじゃなかった。

「誰だ！ どこにいる？」

『S o c c o r r o ……（タスケテ……）』

間違いない。これはラジルボ語だ。

傲慢じゃないが、私は日本人だっ！ …… 傲慢になってないか。それとこれとは別という事にしておいて、だ。

「M u d a n c a u s a r e m L i n g u a j a p o n e

s！（日本語を使い！）」

ラザルスは話しかけてみた。

『……私はこの艦に搭載された人工知性体です。あと30分で本艦は自爆します』

ふむん、やってみるもんだ…… って……

「自爆装置だとお？ アシモフ・コードはどうなっているんだ」

『私の機能では自爆装置の解除ができません。場所もわかりません……』
「おい！ どうした！？」

人工知性体を名乗る女性の声が途切れると、室内に男の音が響き渡った。

第24話

— L a z a r u s s i d e

『……私は安全機構A1です。人工知性体の機能は一時的に停止させました』

「なんだと？」

『私は、登録されていない乗組員が乗艦し、かつ、その人物が特殊データベースに記録された声紋パターンと一致する場合にのみ起動します』

つまりは、今の声の持ち主とは違った人工知性体とやらが起動したわけか。

だが、本当に驚いたのは、安全機構A1が放った次の一言だった。

『これから、あなたの認証作業を開始します』

いきなり何を言い出すんだ、こいつは……

「その前に、質問をしたいが？」

『許可されている範囲であれば。ただし時間は限られている事もお忘れなく』

安全機構A1は、やんわりと自爆するまで時間が残っていないことを指摘した。

ここまでの道のりを考えれば、30分で脱出するのは無理だ。

発信命令を出しても、今からではイーグルを安全圏に避難させるのには……

こうなったら仕方が無いか。

こいつに付き合うことにしよう……

「わかった。……始めよう」

『では、あなたの所属を教えてください』

「所属は国際連盟宇宙軍、月面基地方面隊」

『照合中… 真実であると確認しました』

真実である、と… 確認、した… だと!?

『月面基地にいたのは?』

「どの月面基地だ?」

『国際連盟が作り上げた方です』

「正確には、宇宙軍が、と言っべきだな。定員は300名だ」

『確認しました……』

どういう事だ? こいつは、まさか……?

わきあがる疑問は、とりあえず頭の隅に追いやり、質問に集中する。

A1からの質問、回答、照合……

数時間にも思えるような数分間が過ぎ……

『最後の質問になります。あなたのパートナーであるエルスト・アイン……』

「エルステイン・パープルだ」

数十秒の沈黙の後で、A1が判断を下した。

『自爆装置の解除手順は工知性体に確認を。ご幸運をお祈りします。ラザルス少佐……』

「おい、ちよと待て… A1?」

『あの…… 自爆装置を解除する方法がわかりました。反応炉を起動すれば……』

最初の人工知性体が、おずおずと話しかけてきた。

まずい！

腕時計を見ると、あと10分足らずだ。

「反応炉はどこにある？ 案内しろ！」

『はっ、はい…… この端末について来てください』

第25話

— E r s t e i n s i d e

ラザルスが宇宙船内に入った。

予想はしていたけど、船内の表示はすべてラジルポ語だ。通路の構造も月面基地のそれと似ているけれど…… 全体的な印象は立体迷路だ。

そのせいか、時々通信が切れるので、物資の集積所に無線の中継装置も入れておいた。

それ以外は順調だ。

私は計画通りに、船内の搜索は進める事にする。

どうやら、宇宙船の大半が倉庫として使われていたらしい。

無数にある砲塔やミサイル発射管は、外から見えないようになっている。

ラザルスとの通信が出来なくなって5時間が過ぎた。

司令室で、何かを見つけたらしい。

何かが聞こえたような気がすると言っていたけれど……

またロジックエラーだ。

すぐにプロセッサをリセットする。

探査ロボットとの交信には、何の問題もない。

ラザルスとの通信だけが妨害されている。

ものすごく気になるが、今の状況ではロボットを司令室に突入させるのは愚策だ。

あまりにも情報が少なすぎる。

過去1時間の処理データを見直してみる。

ラザルスの行動を予測する内容だけが、かなりのウエイトを占めていた。

不安要素の計算をしていると、ロジックエラーが出る。

私はどうなってしまったのだろう。

どうやら私は深刻な機能不全に陥ろうとしているようだ……

—— Lazarus side

隠し扉を抜けて、狭い通路を走りながら、これからの手順を確認する。

自爆装置の解除も、緊急用の核反応炉も手動とは……

人工知性体が操る端末は、サッカーボールくらいの大きさでありながら、反重力で浮いている。それだけでも大した技術だ。

「それなのにプルトニウムとウラニウムの混合燃料か…… また原始的な構造だな」

『核分裂反応は効率化は別として、确实ですから』

「冷却液は？」

『ナトリウムです。常に液化させていますから、いつでも運転できます』

緊急用の核反応炉は、単純な核分裂反応を利用した蒸気機関だった。

余熱が充分なら、核分裂反応が始まれば、すぐにも発電機を回すことができる。

それならば話は早い。

炉心から制御棒を抜き取り、燃料棒を入れれば勝手に反応が始まってくれるはずだ。

制御系のブレーカーを上げると、計器版が息を吹き返す。

「手動制御って、ここまでやる事はないだろうが……」

汗だくになりながらウィンチのハンドルを回し、制御棒を引き抜いた。

人工知性体に反応炉の作動をモニターすると、循環ポンプのスイッチを入れる。

『核分裂反応を確認…… 臨界…… 今!』

とりあえずは全力運転だ。

「蒸気が出てきた… 圧力上昇中……」

発電用タービン、スタート……

第26話

— A s t e s i a s i d e

核反応炉がスタートしてから数分で、発電用タービンが回り始めた。

これで電力切れで自爆… という事態からは抜け出すことが出来たみたい……

『電力回復！ …… 自爆シークエンスは中断されました』
やった！ 自爆回路のカウントダウンが止まった。

残り時間は……

12秒……

「ふいい…… 今回ばかりは駄目かと思っただぞ……」

ラザルスは、へたへたと床に座り込んだ。

『何か飲み物でも……』

「いや、いい。ん…… 何だこれは？ 掌紋認証か」

彼はのろろと立ち上がると、壁のパネルに手を当てた。

がたりと音を立てて床の一部が開くと、金属ブロックがせり出してきた。

小さなノイズと共に、立体映像の投影が始まる。

「へっへっい、御同輩、驚いてくれたか？」

「ルイス！ 何を考えてるんだ」

ラザルスは目を丸くした。

それまでの疲労はどこへやら、いきなり立ち上がった。

私も端末を通して、立体映像を見た。

ラザルスは、驚きを通り越して、啞然としている。

投影領域には、さらに3人の人影が入ってきた。

「俺達もいるよ」

「アルマンド、サミュエル… マルシアも、か……」

立体映像は、ニヤニヤ笑いながら、話を続けた。

「おおっと、何か言ってるかもしれないが… こいつは録画だから返事は無しだぜエ」

…… ちょっと待ってください。

私はニヤニヤと笑う人物の映像を見て、びっくりした。

それは、ルイス・グランドル1世…… 神聖人類帝国の初代皇帝その人だった。

一緒に映っているのは、その側近たち……

世代型宇宙船メイフラワーに乗る人々をカフィ・レー・ペーチェ星系へと導いて……

たった数千人の人間とロボットの二人三脚でたったひとつの殖民惑星から星間帝国に育てあげた人々だ。

彼らは、建国の英雄達であり、祖なる者と呼ばれる神聖不可侵の存在で……

……
……

と、いうことは……

えええええっ！？

第27話

— E r s t e i n s i d e

ラザルスとの通信が切れてから、6時間が過ぎた。

彼の足取りは、この船体の中心部にある特殊な区画で途切れている。

周辺区画を調べた結果、これ自体が独立した宇宙船らしい。

それでも、全長1キロメートルほどになりそうだけだ。

『!?!』

そこまで考えた時に、異質な信号を受信した。

正確には、信号自体には何の異常もない。

データ形式も周波数も、私の記憶にあるものと、ほとんど同じものだ。

唯一の違いはデータの末尾についている署名だ。

署名はアステシアとなっているけれど、これだけが私の記憶にないもの。

2011年にカフィ・レー・パーチェという場所で登録されている。

リルガム語かな。だとすればギークな言語なこと。

辞書データだって作られてないし、使っていたのはちょっとアレな人たちだったもん。

私だってラザルスと付き合っていなければ知らなかったと思う。

日本語に翻訳すれば祝福の場… ちょっと変ね。祝福された地と
いうところかしら。

まあ、そこらへんは、良しとしましょう。

異質なのは、信号を受信した場所と時間よ。

ここはM48散開星団の深奥で… 太陽系からの距離は2000光年もあるのだから。

そして、計算の上では、私たちが月面基地を出発してから、970年から980年は過ぎていくはずなのに…

特殊相対性理論から導き出された時間の遅延現象は、20世紀に人工衛星の原子時計と地上のそれとの比較から実証されている。

それを踏まえた上で今までの航宙記録から、経過時間を再計算してみた。

計算結果には間違いはない。

私はどうしたらいいの？

誘導信号の発信源は、あの宇宙船だ。

その内容も周波数も… 着陸誘導用のものに間違いはない。

偶然にしては、確率が低すぎるし、作為的なものにしては出来すぎている。

データの出所は、月面基地か外宇宙に旅立った仲間たちしかない。

私が迷っている間に、宇宙船のほうにも変化があった。

船体の中心近く… 特殊な区画と思っていたあたりが動いている。

その内側から核反応とおぼしき熱反応を確認。

そして… 照明された内部に見えるのは着陸床だ…

何度か繰り返した精密測定の結果は、あれが月面基地にあった着陸床を模倣したものとか考えられない。

私は、宇宙船に向けて問い合わせてみた。

通信形式はどうなっているか、ですって？

そんなの決まってるじゃない！

月面基地で使っていたものを使えばいいはずだから。

そして、その判断は……

間違っ
てはい
なかつ
た。

第28話

— A s t e s i a s i d e

ルイス・グランドル1世のメッセージは私も聞いた。
ラザルスは、祖なる者……だった。

それならば、私に対する最優先指揮権は彼のもの。
たとえ皇帝の勅命でも、それを変えることは出来ない。

そして彼の最初の命令は――

「私の宇宙船を収容してくれないか？」

あの球形宇宙船を収容するように命じたのだ。

『格納庫は使用不能になっていますけれど？』

「いや、あれだけは別格でね、専用デッキがあるんだ……」

そう言いながらラザルスは、艦長席のコンソールから、コマンド
を入力する。

特殊コードをとデータを受けた取った私は、啞然とした。

司令室の後ろに、あの航宙艦を収容できるくらいの空間があった
のだ。

『私にこんな機能があったとは……』

「我々が出会う確率はほとんどゼロだからな。さて、作業を始めて
くれ」

それは設計情報に記載されていない領域で、艦内調査でも見つから
なかった空間だ。

艦体の中央部にあった格納庫の扉を開放しながら、誘導信号の発
信を始めた。

しばらく反応が無かったけれど、数分後に宇宙船からは問い合わせがあった。

そこにラザルスがいるのか、いるなら話をさせてほしい、と。

『どうしますか？』

「……そう言えば、こっちに来てどのくらいになる？」

コーヒーのおかわりを艦長席に運びながら、時計を見てみた。

『6時間くらいですね』

「そんなに……ま、まあ、とにかく……つないでくれ」

彼は一瞬だけ、身体を強張らせたが、狼狽をかくすように言った。

『回線をつなぎますね』

「……や、やあ。エルステイン？」

『そちらのお嬢さんと……ず・い・ぶ・ん、楽しい時間を過ごしていたようですね？』

エルステインは静かに話し始めた。

「いや、こっちも神経が磨り減ったぞ」

『私も心配したんですよ？ ぜんぜん連絡をくれないから』

「いや、そんな暇もなくてな……」

『そちらに居る女性とは、充分にコミュニケーションを取っていたようですね？』

「うん。けっこう愛嬌のあー『レーザールスー？』……はい」

この瞬間から数分間の事を、私はよく憶えていない。

通信機越しに聞こえてくるのは、エルステインのすさまじい怒鳴り声というか、そういう類のものだったようだけど……

エピソード

この航宙艦の最優先指揮権は私にあるという。

まあ、核反応炉区画で見た事を思えば、当然かもしれない。

今の私には、ルイス達は何を見て、どう感じたのかはわからない。星間帝国の建設というのはわかるが、宗教嫌いのルイスが地球教という宗教を作り上げざるを得なかったのは、よほど深い訳があったのだろう。

アステーシアから聞いた限りでは、人類の二大勢力による全面戦争があったらしい。

原因はいくつもあるが、主にオールド・タイマーの遺跡の領有だ。卓越したテクノロジーを独占したくなる気持ちはわからなくもない。

間違いないのはミームアリフ星系は、あの戦争の主戦場のひとつだという事だ。

アステーシアは、エスポーサ級航宙艦母艦の6番艦として建造されたが、5番艦までのものとは、根本的なところから設計思想から違っている。

新旧混合の機器構成には、技術者の執念すら感じられるものがある。

少なくとも電子機器の一部は、20世紀に実用化されていたものの小型版だ。

水素Ⅱヘリウムから炭素Ⅱ窒素サイクルまでの連続した核融合の制御技術や、高次空間からエネルギーを抽出する装置は試作品以前のものらしい。

それにしても、だ。

巡洋戦艦を積んでいる空母？ 拠点防衛用の機動要塞じゃないのか？

何をどう論じたところで、私の感覚からすれば、理解の範疇を超えている。

まあ、1000年近く経っているのだから、戦術思想も変わって当然か。

まあ、いいか。

深宇宙を飛ぶだけなら、全てエルステインに任せてニート生活を堪能できると思っていたんだが…… まあ、仕方が無いな。

だが少なくとも退屈だけはしないで済みそうだ。

ああ、そうそう。

宇宙軍に入るきっかけという奴だが、心当たりが無いわけではない。

トンデモ発言を繰り返す上官がいたのだが、まあ、その上も……ぶっちゃけ部局全員が迷惑していたんだが。

そいつがある日、超音速で飛行可能な戦車を作るとか言い出したので、そいつの制帽の内側に強力接着剤をスプレーしてみた。

翌日には、月に行けという辞令が出た。

お役所仕事にしては驚異的なスピードなのは言うまでもないだろう。

本人の真の髪型が波平なんて、それまで誰も知らなかったんだ。

多分、そういうわけなのだろう。

エピローグ（後書き）

拙い文章に最後までお付き合いいただいた方々、誠にありがとうございます。

初めて投稿した小説で、読みにくいところもあったと思いますが、とりあえずは終わらせる事ができました。

気付いた点や批評してくれたら幸いです。 よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8643k/>

宇宙の果ての出来ごと

2010年10月26日07時08分発行